

剖検例における潜伏性前立腺癌と管内異型過形成の病理学的検討

溝口 幹朗 岩崎 宏 菊池 昌弘

福岡大学医学部病理学

要旨：近年、本邦では前立腺癌は増加傾向にあるといわれている。一方これまでの報告によると本邦の潜伏性前立腺癌の頻度は欧米人に比べ、臨床癌ほどには低くないといわれてきた。著者は剖検で得られた40歳以上の前立腺508例を用い、潜伏性前立腺癌と前癌病変として重要視されている管内異型過形成の関連について病理学的検討をおこなった。508例中潜伏癌は108例(21.3%)に認められた。潜伏癌108例中30例(27.8%)が多発例で、発生部位は外側部が97.2%と圧倒的に多かった。潜伏癌の組織型は、高分化腺癌107病巣、中分化型腺癌27病巣、低分化型腺癌6病巣であった。また2例の粘液癌がみとめられた。管内異型過形成は137例(27.0%)に認められた。潜伏癌と管内異型過形成は加齢とともに増加傾向を示した。また潜伏癌108例中55例(50.9%)に管内異型過形成の合併が認められ、一方、非癌例では400例中82例(20.5%)であった。これは非癌例に比し潜伏癌例の方が、管内異型過形成の合併が有意に高率($P < 0.005$)であることを示していた。これらの結果より、生検において管内異型過形成の所見があれば、癌の合併の可能性も考え経過観察することが望ましく、これからも増加するであろう前立腺癌の早期発見につながると推察される。

索引用語：前立腺、潜伏癌、臨床癌、管内異型過形成